1 5
1597
5

門 15
號 1597
卷 5
冊 五
號 十三
函 十七

# 駿甚雜詰卷五目錄

信集

月卿世之秋兒
遍照の思ひ
詩文の評呉
六義乃沙法
多錢善賈
曇陽大師
言ハ身の文
充物人を稀に
離騷の秘事
世とすてゝ分とすてゝ
倭歌の感興の益あり
作文と讀書のわり
文章の鑒裁
寸鉄人を殺す
一日の澤
幸ひなるかな

壬子試筆の詞 附

駿臺雜話卷五

月をせくの形見

今年もそれ少年過ぬれば。秋はけしき来りて。蕭吹
かぜも殊よりあはれなり。色衰へ形ひなびたる老は
徒さめも見苦しかり。されども同じやうに。わが夕暮よ例の人々
打ちまじり。文もまつりんやうにせ。歌をうめく。今
宵は月とよう。酒もすめんとあまたとあつまりて。
を、うちそそのかして。色きさわらはやうに。若衆をあまた。清き談の表や
うに繋き。行よ家人やうにんあるに。なほてよわりもうみ
さ、ぬ。なをくるに。緒客皆酔ひ。長よ入りて。其

中に一人盃を停め、青天有月来幾時、我今停盃一問之と、
向う靖とそらうゝ打吟しければ、又ゆうを編みつけく、人攀明
月不可得、月行却與人相随とうゝ、又かの人く送よ唱和して、
次と皎如飛鏡臨丹闕、緑煙滅盡清輝發とうゝ、又云ふと但
見宵従海上来、寧知暁向雲間没、白兎搗藥秋復春、嫦
娥孤棲與誰鄰とうゝ、其次ふ、今人不見
古時月、今月曾經照古人、古人今人若流水、共看明月皆如此、
惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏とうゝ、其
後数献よりて、例うたかたとして、
太うゝて月ともめしやうとよりあるとも、光のくもり月うゝ
さゝ侍るさまゝ、其よつきくゝ載無窮の感もあるべし、
月と人の光やゝなるもいつゝ、但月光ゝ
出ゝ侍る、其時、多くゝ八月十五夜、今宵
居名ゝ、さる武士の一丁字知らぬ、月光ゝ
徑ゝ、ゝ天、おれゝき、名ゝ、又同ゝの人うゝよ
ゝ、おもひきの切にとゝ、奥ゝ長さゝ、何とゝわんやくたれ
よ金樽ゝ、けれなきゝ、清光を喰ふかゝ、もおれんよなた
かゝ、今おれゝ世俗月光賞して、光のわうきをとゝ、歌のき
よきよめて、良和とくゝ、打とゝ、物喰酒のこゝろとして、歌
のこゝろを解とゝ、かのすゝを清るよゝ、ゝうぬ、又騒人

墨あるは月を新めて字あるは人を尋ぬを雕句とし錦繡を裁
ずんば風雅中に用ゆまじ。其も多く景氣のうへ感物なり
ア和歌月ゆき感中に其まをこねなる是ゆゑ載無窮の
感やハ我倘古人を尋て共をとみ共人をとらしく
常に世を厭る恨中に月をうつして世代人を照て今
よわを古人に対ずんば八月に対して昔を思ひ
こゝをさかうこゝ古人に向新もうるこゝ月をのいと
も信るやうもおもへく高きくしたりしまをとらしまりしくも
おこゝ中おこゝ。今李白の詩月の余韻をすてゝ一氣に古今を泛
説して。青天有月来幾時と。氣象のこゝ抜群に



用へく。清光豪蕩超逸なるもの。如此作人の及べきまこゝにわ
ひ。ゆゑに李杜とく杜甫のよて極するも沢やくゝ我作を強きも
李白の詩。古今流のあとを感するとやく。後代と作のんとを
ゑ。筆ゆゑ楚辞をよくして。雅者余弗若吾不用とゝ
屈子こゝとおゝこゝたゝ。感ゆゑ屈なんおもへきゝ二句に意
ゝゆゑ屈子一代に知己なきとかゝこゝて古人を泝ゆゑ。
ゆゑ共わこゝと一度わゝく流ゝてとおゝ。其無ゆゑ及ゝ
又其世ゆゑさるくゝ世わゝこゝて家とんを用ゝこゝ共ゝ
人をきゝ。ゆ雄ゆゑこゝんとゝ。そなん屈ゝ限ゝ古今心あ
るきゝ。たゝこゝ恨ゆきわこゝ共人ゝて月を人

ものやうく感ぜらるゝ。そのかたちも今ゝまさに昔なりとは
いふものの代々の天皇のおはしまし月を對して今と思ひ人をやわんは
ばさらに我世をも思ひすてゝわたらせ給ふものなれば
月をさはりとものこゝろまどはしたるものなり。

月見ては事代はるくもゆゑに世をわたるとはきゝうれ
ぬるかな　あるとものく、後の月を見て感わたらせ給ふと端君
考へ思ひ給へ。くもゆゑに世をわたるとはおもしろ

## 離騒の秘事

法ものゝ風にて屈原はんとゝして月をもて世をわたるとはきゝうれ
今の世よ為あれば屈原のごとき。世ぬしを遺恨申さるゝ人者



ハ吾不聞と、いまゝ仕れもあるべくもなけれども月を
わうさんさゝ代屈原はひとゝして。離騒のことをとゝけ
ゝ法ものゝ。きゝ給へんやゝ。所。端君はいとゝ幸よりも耳
とゝ法ものゝ。所けれざて。為樹。辭ハ離騒を第一とん。屈原ハ同代
家に生まれ。樹と為わ。人ものゝ。人方と謁しけれと。懷王ハ
志く。小人の讒と信し。其忠をもとゝ。御よ。をさ。くゝ。表
と怨ものゝ。國をうれ。倍とかゝ。為わ。山筋を作り。
一筋ハ方ことゝ。屈原を同族ゝ。世卿の家よりまゝ。
才を潔し。行を脩し。人を奉ずと思ひ。一國の望を志た
しみ。新を抜て。志を為。幸を。要芳を佩く。奇服を

好(このむ)まさりん言葉(ことば)を託(たく)し。たとへがたきほどなれども。讒(ざん)にあひて君
の心まよひまして。はなしとらへんとせしとき。時俗に用ひられ
ず。かたきを忍ぶといへども。蘭(らん)蕙(けい)をそしりやつし。芳草(はうさう)にたとへたまはれ
ども。其かんしんとなりて。今かれらあざく。讒佞(ざんねい)国を危(あやう)
すれども是(これ)を聞(きか)ずなりぬ。されば国へもさうまうしかたく。ひそかに身を六つ
にわかちて此すがたをあらはし。又国を去(さり)て。故郷に思ひをのこしけれ。
よしさうえ汨(べき)水にしづみける。されば楚の人をして。後に舟をもちて救ひ
悼(いた)みつゝ匪躬の忠言を溢(あふ)れしめ。其道をよみて。忠を見えぬとぞ
思へし。されば其志をもちて。今の世まで及べり。但離騒
の。おこりを。いかにしても。其根をあらはさず。大切のことを





託して其心を述(のぶ)る離騒は秘本なれ。其秘本といふは。よく詳にわから
ぬものを。義理の精語(すこ)にあり。帝(てい)高陽(かうやう)之苗裔(べうえい)兮。朕(われ)皇考(くわうかう)曰(いはく)伯
庸(よう)といふ出だしより。いかにも哀れなり。気高く身を思ひ給ふ心なり
離れ。又六朝の士大夫は一つ世に比べ。月年は武士の王孫を名高とは
其名をたち。それぞれにわかれて。人を先祖を存じもれ。歎を
忘ざらんとて。乗ずらしも強く。皆ひとも崩るゝを殺ぐ。屈子され
ば先祖を嘉し。名をそこなはず。父はおもきわかれをうけたまはる。
いふ名をもちさけ。先祖をうれしむ也。思ひはかりくらべを。かい
くいひかけるとうれしくわかれまでなり。其功に皇(くわう)覧(みて)揆(はかりて)余(われを)于初度(はじめのとき)
兮。肇(はじめて)錫(たまふ)余(われに)以嘉名(よきなを)。名(なづけて)余(われ)曰正則(せいそく)兮。字(あざなして)余(われに)曰霊均(れいきん)といひ。又深く

紛（こんとう）吾既有此内（たひ）美（び）又重（ちょう）之以脩能（しゅうのう）とて自賛（じさん）する
ゆゑ屈子（くつし）ゑんつゆ〳〵きらひ其月賛つゆことを父母（ふぼ）と大事（だいじ）
ゆゑ〳〵おもひ名（な）を名（な）つけ脩能（しゅうのう）を按（あん）じ〳〵教育（きょういく）する心（こころ）
かゝ〳〵おもひ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ〳�

## 遍照の恩かみ

爲又いとけなき父母をとなへて人窮してを父母あらはしおこの天性なりて自然に親なるべし。古へ人孝子は常に父母と四方くらしを考へ給ふ。親のなき父母に名をわすれたるなんあるべし。おもかくしたる果し。我身を父母に恥を施さん事を思ひ給ふ。ことに孝子百行の中にもすぐれ。さきに八歳子孫よりて父祖をおもひ給ふ。その恩の根ゆきを知らしむ。うし良孝の宗貞。

深草の帝はおくをたまひて。後は家に信心遍照院なんいひしその遍照院に父母を思ひ給ふ。



あらちはしかくまでもうけ給ひ。ろかみなくすやわらんをてよ佛よりて世を捨とも。そのきはよりて父母をおもひ出れやく。天性は父母を高に思ひさる地に出やれ。ちう孫ちう孫は親とすてて家すると真に逆とすれこ。きかりしを思ひ出ると云れ。けるこれなく命一度は古今賢人宗貞を一代の寵臣。長人物のおくを四の清中をあらはし。浅もも名卿世源の家に生まれ。その父無ちんは。こ其はうこ國に生く。身をこのうしめさるやうをわくしを捨ちしら。今身窮して。ひとりを離騒を作りて父祖をおもひ。倭歌を詠して父母をとふ。そもそも作ることも。なつかしを身にて

国を捨て、死して家聲を墜さじとは、我父ちゝけしをとゝ
ぶらひ、はんいまもゝ宗貞を家とゝして世俗のことを抛擲
の為なりとて、あるいは、あるいは、髪をわけねぢりの
すがたにて、諸国を遍照う歌をよみて、よしのゝさとに
うせにけり。

あるひとの、かくてすがたをかへ、ものをもいとはらんその
ゝちは、彼うばそくきうけ、ゆゑ、此父母に、仏法をすゝめ、髪
をおろす、父母、親恩とすゝめいはんとすれば、いかゞ、
仏法に惑ひ、天性に育すべき、今よりなりとさけ、告るときや、
かう、責ていとかくなん



あるひとの、此世にうまれ、世をすてゝ、身をすてゝ、えねとの、たれ
たれのそや、源平盛衰記とよまれ、緣きゝ、伝へうけ、よ、頼朝敵まれ
ゝ、ゆゑ、東国に、ゆき、おそれ、ゝ、敵よさ、ゝまて、すてよ
自殺よ、乃ん、かくする時、髪の中より、仏の小像をぬい、出し、首と敵
よ、渡さん時、大将軍、此ものあらんといえども、かくこのそ、き
事かくて、ゝ、ゝとなり、いたゝ、心、ゝ、公なる事、此人よりの
きまあるゆゑ、仏法をもの、て、後生をとむすこうんとおもふ、丈
夫のおこなひあるべし、ゝ、思ふ、ゝ、八、さ、ゝ、もたの
ゝ、と、仏とは、ゝ、ゝ、あのゝ、ゝ、ゝ、えねわ、ゝ、
わなうまれ、ゝ、ゝ、人皆善悪の人と同有すべいつまをゝ、

さて遍照は父母を思ひいで、なつかしく思ひなつかしがらと云ひし。頼朝は敵を討ちて勝ちて、なりつかぬ事なしと仕ふ。

世をすてゝ分をすてゝ

さて遍照、世をすてゝ、あちらをも思ひ出でゝ、芳人をもあらそはず。遍照は世をすてゝ、籍櫻山に出家して、行ひすまして、父母の中なる思ひ出でたる後、佐賀の山のふもとに、そのかの遍照は、旅もはさんこそ、なつかしけれと、苦しき枝、かくきゝ給へ。若とき、あなかしこ。



そもそも、家を出でゝ、なつかしう家をあこがれ、出でゝ、世を捨て、家ふれんとて、さて遍照は、行中に、あり、おなじ事、行脚の序に、縁会を思ひ、霧園の、那集に、世を捨てゝ、なつかしう、其人、うらやましく、と、云ひし。頼朝やうて思ひ、菅中に、倚、馬倭、旅に、中、とこそ、ふかの巍々、物ゝ、物、そこ、物、かくこそ、思ひ、物、ゝ、思ひて、菅中に、物、ゝ、思ひ、浦留山、そこめ、高かの、辛傑、も、人、なき、あく、思ひ、ゝ、頼朝、もすてゝ、おこゝめ、思ひ、ゝ、思ひ、ゝ、物、思ひ、ゝ、もなく、思ひ、ゝ、引、物、思ひ、なく、中、ゝ、物、中、ゝ、物、ゝ、菅、あ、物、の、猪、を、物、ゝ、と、菅、菅、ゝ、あく、出、物、時、遍、れ、ゝ、ゝ、物、ひ、ゝ、ゝ

四人なりうせ世くさとぬ其後伝をきちく。ぬくしひ育もせくとしたち
其ち後高雄の文覚といひ豪猛勇猛此頃信孫孫舎此拾を
加りて新へな威を振ひ〳〵高雄りう人となるなあくそてをよ
ま一をし〳〵西りよあひなはやのあくを身〳〵めんやいひよ威時
ありる雄ちてをくれ心比以行よ文覚よ宿をてかと
ちに文覚者とち伝ひく其伝先よいけ行よ此ち月よ西り
月ひ〳〵うちに打んちく拳をを抑てに行行よ先子をも幸
お事んおくうおくはゆ〳〵早思ひ〳〵よ文覚ありを一月月て氣を
奪ちを志ひく〳〵と后伝〳〵者ち後見よ先子をもはとて云系
ゆを船ちはさをはをといひをを八文覚彼ちに行ちあり〳〵めを月よ我を



うの色きをのなをとといひをを見ちく其人〳〵ち高潔こよ
して氣魄精神あちうおよあちさ行まを知ちく。ち情ひき
は儒乃世よ行ちを世さち氣よ。かゆ此人あまをも真此道をちに
其質此ち明なるに大ち世をいとひく法屠よゆするしを法ち
しをを但者をすて剃髪すて〳〵仏よゆて家此ひ成ちをけ
ひをちをちを世をは捨をとも其人ち者ちを人父よちをも身をを
すくぬすくあちをちを身を捨すて世をすんをもをくうに世を人
あちをく名利を行ふも世をすて桃楽を行ちを清濁八かをを所
の楽を四ちを同〳〵の所色〳〵ををちを仏の教ち人偏を偏をこん色
八。若又をすたれちうをさるあちを八ちに。あををくも捨あやなちく八

一には身の楽をたのしまんとするにあらず。名利にまよふなからんとて世をのがれ
うるなく。ぬも及ばぬ名教中に自然の楽地あれば。何ぞ必しも人
倫をすて。事物を離るべき。人倫をすて事物を離れて後に己が
性に楽を得るやうなる世をすてたるといふものは。すべてそれが道に
違ふべし。楽欲をはなれたるものにはあらじ。或人語りし。ある郷里
に貞なる婦人有しが。夫におくれて自ら哀慕し。其緒も絶
ぬべう見えしに。甚く嫌ひて。いかにともいさむべきよしなく
に。身を仏法にさきがけ。それより婦人にいひければ。夫を
なくしたる事の悲しさは。仏法に帰依したればこそ。まぬかれなく
男女の道もなく。頼みなく。なりたるよしにて。



なるにかへりて。かのしむるなど。すまじき事をなして。私欲ある
まよひ中に。大なる罪障を増長して。その悪よりして分別
なけれは。よからぬ事をなして。婦人の怒に心をみだして。それ
よりもなけれは。なほまよひけれども。八宗をかねたる此僧。婦人を教誨せし
は。誠にかしこき。かの身とならずとも。甚身を用ひて。おこなひを正しくし。それ
若よりも。経に説く人。貴賤男女をいはず。ほとんど身の苦楽を
より起らぬはなし。明者の人とても。此婦人の見るも及ばぬ
あたら人材をむなしくして。既にかく世を去る。まだ代に
ささへありとも。なほ空のみなるのみならず。

宇宙依然百代流。道喪文弊思悠々。誰知天上孤輪月長

照人間萬古愁。
詩書道廢共誰陳。邪説紛々日。競新。明月似知千載恨。
慇懃來照白頭人。

詩文の評只

他日繼く法を集せ。この各疑問事法く。法文の故なれのよ。
いたまて義をひらく。詩文を学問の作事なるに。急暫中を作
て。中元も義を游共類とやはりき。さきに公共法を論を示
多くゆとり。公義先詩は事を論して法を云為筋とこの旅すれよ

及て。漢魏以後の詩。文理悠暢。意思淵永。して。風雅は勢を
失て。ただ。蕭統の文選のすれ古詩十九首。を為く。楽府
歌行の詩をよりて知り。志うるなよ。初よりなく。倚靡をきそ。浮
華を法とあ。ただ。風雅の體を。ひ法ひよ。唐與て李杜と稚
う流そ。六朝の作者と一流し。ちよ古風を振與せ。よる。今よ
ゆく詩をよ学ん人を。唐詩を学ばさるの。盛唐は法を古と
さる事遠。やはり。風雅を学ばさるよ。人情をよりよ。風雅は殘
膏剩馥。おのれ。おのれ。人人を感ずるはあまり。学ぶは性情
を吟詠するに。唐詩も捨わるきのよ法。学ぶは司馬温公杜甫
の國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。の詩

と詠して、古人は詩に意在言外を貴ぶ。山河とは、
なほき事言ひし、草木深とは、人なき事言ひ、
平時は、たゞ貴物なりて、そもそも凡く物の風、
時流離の情いとゞして、
やうく、風月繁衣燕、頑人黍離等は、篇、
の感あり。後世多く唐人の詩を、
やうく、懷友を、いとひとし。懷友の名は、溢る。潮打空城
寂寞回とは、興亡を、
は、體を得たるやうに、
やうく、なく。唐詩の、李白は、大原早



秋を賦して、霜威出塞早、雲色渡河秋、夢繞遼城月、心
飛故國樓、とは、詩は雄壮の氣を、
南は、江亭を賦して、水流不競、雲在意俱遲、寂寞春將晩、
欲、物自私、とは、詩は深遠の、
ア、高は、王維は、月落江湖白、湖来天地青、とは、杜甫は、冥楚
東南坼、乾坤日夜浮、とは、孟浩然は、微雲淡河漢、疎雨滴
梧桐、とは、柳宗元は、壁空殘月曙、門掩候蟲秋、とは、則
雅の詞を、
多を、
やうに、

の秋興の八首は杜甫の詩の諸篇を其體をそなへたるも
各其法を得たりて其傑作なるものなるべしかるに
中唐よりは晩唐に至りて章蘇州柳儀曹の如き易黎の文
章古今に卓絶すれども其詩は世に遠ざかりて
孟郊賈島の寒瘦元稹の輕浮白居易の淺俗李商隱の僻澁
温庭筠の媚艶いづれも詩の厄なり其他多く盛唐の
人に及ばざるもあれども甚大槩を論ずれば定論なり只格調
のみ高古なる其外は作者多く聲律に拘はれ高白の作
性情を吟詠するものは少きなり鄭谷の雪を賦して
江上晩来堪畫處漁人披得一蓑歸と作るを東坡の評して



そは村学の中代持ちたるなり柳子厚の作なり千山鳥飛絶萬逕
人蹤滅孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪と云ふ詩と別格のものと
云ふべし鄭谷の詩は巧なれども俗耳を楽ましむるを主とせり故に作
其中に八句の鄙俗なるもの多し東坡の眼力はた
しかなりと知るべし細雨濕衣看不見閑花落地
聽無聲と云ふは盧綸の作なり人口に膾炙して流行
とよく云ふべし冷泉先生の作味なし宋代の作志南
の雨沾衣欲濕杏花雨吹面不寒楊柳風と云ふは清潔所服唱酬
もよく味ひて盧の詩中にはなきものなり志南の詩と朱文公
の詩作れるものなるべし

て梧桐月向懐中照楊柳風来面上吹とゝ云あるは又一等
從容に紹象わたて有さに成とゝ云ふ　扨は風流人豪
とゝ云ふ山之人の作句調景絶とも相似て　おのゝ作ゝ之所よきあ
え作る盧は辞をとゝ云ふ　志南康節八情をとゝ云て情よりて
わたゝもあく志ゝ絶く新さ婦よ物を八理屈よ落く味なく情と段
きを八意思と含く味わた志ゝ八ゝ成ゝ物景に人辞に雅俗を
志ゝ作て　おんこゝろ情に沈あを及ゝ　今世なく詩と賦する
人を見ゝ多を句絶唐詩をとゝ作くよ由に志ゝ　多くゝをと
出ゝ多て　已ゝ俗腸ゝ多ゝ志ゝ　扨は作る　巧なる八新詩を
きくよ似ゝ　抜きて　弾源をよむよ似ゝ　又世よ一種偏曲無

實に人あゝ志あ世に志ゝ　樂府古詩の辞を剽掠して
ゝ成ゝ傲ゝ　已ゝ表流の外　一代よ結なゝ　扨も高
よりもよ　猴碎流離　一面よ文理を失ゝ　厚に岸に　おく斷梗に
あゝ　文ゝ世に怪ゝ　扨も志ゝ　扨よ吉業の人を相所に　おく
を文雅風流ゝ　わ志く聖人の道を文雅風流なる事と
ゝ　ゝ　きく作る文雅風流をゝ　ゝ志ゝ世よ道を文雅風流なる
物なく　いゝ作ゝ　いゝなる　ゝ　ゝ志ゝ　ゝ作る人あゝて義
よかく世に出ゝ作る　さゝゝを道を仁義中をわゝ作て　作歌愛
絶よあるよ志ゝ八孔を志ゝを世に強客作人ゝを道よをゝし
けあ　今ゝて志ゝ志ゝ　ゝ作ゝ　ゝ作ゝ八

尚戯なり。とかく文を好み華飾をまとうて道の
なりきといつてもかくもかく人の心術を害するは只
ものよみとむくき事なり。但一向に詩歌とあつて風雅の
道をたしなんは質樸なる野なる方はやはらん。

倭歌は感興の益あり
さきに我邦は歌あるゆえ倭歌はよく和らかにして
詩歌はかくの如くよろこばしきものなり。我邦はしかるに
あつて乃文辞はよくして李杜諸家の詩をよむ人まれなりたと
讀てもその意を解しがたしあるいは白居易詩和の中に倭方
の風もかなり平易なりて毎篇を茂狂なりと唐詩の上等



やうにてなのうて長慶集をのこすべきなり其詩をこれ
書淺拙作なりて只風流なるのみ。情風藻事加文粋なと考く
加給へ。及く和漢文山花禅師の詩句の體は一種澹泊
味あるべくして近きものなり。我邦は詩をすべて陽ずれ
事なるゆえ。さて倭歌はもつぱら我邦は人情をとりて性情を
吟詠するゆえ。詩はかくの如くの事なり。詩は
一首をもつて詩とするゆえ其人情を尽くすこと二十一字
は尤多きなり。角力の爽時は唐は詩を好く續て貫至
る早朝大明宮の簫鼓千條弱柳垂青瑣百囀流鶯遶建章鈴
佩聲隨玉墀步衣冠身惹御爐香賦一篇をもつてこれを推

う九天閶闔開宮殿萬國衣冠拜冕旒日色繞臨仙掌動
香煙欲傍袞龍浮と賦し。岑參の金闕曉鐘開萬戸玉階仙
仗擁千官花迎劍佩星初落珊拂旌旗露未乾と賦し。杜甫
の旌旗日暖龍蛇動宮殿風微燕雀高朝罷香煙攜滿袖
詩成珠玉在揮毫と詠ずるとあり。文永の頃赫奕たる
開元泰平の氣象目中にあり。かゝる世にあり。倭歌の風
情も殆ど燭の月にあけるあるこの作にそなはる。あるいは
しばらく待よかの君わすれて人を恨に益なきよわれ
風茅菅の旅寝に来〻茅菅薄言采之采〻茅菅薄言有之と
いふにそ。元と婦人の作なるを来〻月をゆくるを月こう



婦人の作なるにかなるべきなり。もかの作なるを。其時代泰平なるに
婦人の作なるまゝを為れば。其時代泰平なるにて。婦人の作なるを
そのまゝ其人の作なるかとおもはれやすし。されどかゝる
作なるを。其人の作なるを。我邦も延喜天曆時代の作なる。朝廷和歌
に同歌なるべし。来〻茅菅薄言采之采〻茅菅薄言有之と
よくかなひたる。其外古今集に歌を詠まれたる作なるべし。
おもふにこの一句に歎するあるべし。
そもそもさいかゝる作なるにかのあるべきよわるべきなる。
扨て。此歌を吟ずるに。老人の懷古の情を感ずべし。
ちはやぶるかみのやしろのあやなれ。桜乃ちれるこの月のあやは

かゝる。此歌を吟すれば。有漢の奇拂の儀を感ずべし。

世中はさらぬ別もなかりけり。思ふ人のみ恋しかりけり

此歌を吟すれば。著名の親の情を感ずべし。

風ふけば。眞葛原の秋の色。思ひ出でぬ人の面影

此歌を吟すれば。貞婦の思慕の情を感ずべし。

春ゆくと。思ふ心の。なぐさめに。雪ぞ降りける。花の白雪

此歌を吟すれば。君子の志。故郷の情を感ずべし。此歌のごとき。もなほ。我国にも多し。古今集・後八代集よりもおのづから。

ゆゑ。中よりも常にゆくんする。この一首なり。孫公二代實朝の歌なり。



我国。天地のこゝろ。人の胸中。わかるべきなり。

此歌を宮家で評して。鬼とも別々。體をいとまなく。故に

男性とも。すべきまでなる。奇しき。あはれ此體の歌。行くゆく行く。

ある人常よりこの歌を。世間の重華とも。ひとりの志を感ず

て。旁氣とも。しきやとも。思ひ出でぬ。さくら。秋のわくまを

思ひ出でぬ。月ぞなかめ。我歌。ある。芸のよるべ。さるべ。

やうにおれば。おのれ。うきゆ。もやなまを。かの河にきたるよう

いひ。なくなるとも。人ゆる。感ずべしてすべて。芸術の今世

世にあれ。教育をとく例。いたく。

人のこゝろ。光のとけき。たちの日。高くなん。第九ちの日。

胡月のかげ。春雨に出る。さくら。花まさかりなる。
うちちるは。わやをもはぬかぜ。はるかに。ちりやすらはぬ。
遊興。夕べ。なくうぐひす。夕べ。さくらけなる。
夕べ。春。つゆ。月。
秋風。ふれる。雲。
洋の海。波。
詩。
光。歌。言。
えぶり。
雪。



いつもうつらもれ。詩と。
さまた。俳歌。
ちくいつて。
く。わくとき。
晩唐。後。詩。
なれ。
つ。
六義。所治
序。
わつ。

和歌をもてあそびとしつゝ、義倭詩を本とし、詩は、義、古今
集は序よりはじめ、いろ〳〵はなやかなるまゝなん侍る。侍ハ
風雅頌賦比興をもて、六義とし、風は諸国よわゝゆゑ男女各己
が情を述るは詩、国〳〵中く甚風體、そゝろゆく風わいかゝ。雅
ハ朝廷の公卿大夫等、己が情を述る詩、聲正しく體いやしうな
ゆく雅といふなり。頌は宗廟をほめ、祖徳を祈る詩、
詩なりき。ハ頌なり。つゝしみなり。このゝち中く詩の全體をすゝるゆゑ、ハいと微
物のゆゑ、わるゝ。ゆゑ〳〵なれゆゑ、ゆゑを三絃とし、さて、撥比喜、こゝを
かゝ、こゝ、ゆゑ指をもてくわして、風雅頌の結ひ方、撥比喜、この體
をもてゆゑ、なく、いく、撥ぬきわれ、ゆゑ、ゆゑ、とこゝ、緯と

也。こゝ、緯を合せ、六義とし、こゝ、ゆゑ、ゆゑ、結ひ、祖父、
也。格別なり。三緯ハ毎章詩の仕立ゆゑ、侍る、葛覃
巻耳なり。詩ハ、ゆゑ、侍る、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ハ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
宮人冬蟲、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
婦人柏舟、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
きゝ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
無、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、
福履、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、

義なるべし。倭歌を編するに万葉集よりもれ侍りし書は風をもちゐるに
なるべし。其外古今以下代々の歌。多くは輦轂のもとにて。此体なるを。是を雅と
いへり。閑秀桑門の作又は慈釈教等の歌にまじへぬ。誹といへつらん。
神祇慶賀の歌なとなるゝ。甚正風頌にあらず。しかるにそれも是へ寄ともそれ又宗
廟楽歌のおもむきにかなふなれは其体又別なるべし。是ハ風雅頌の三ハ倭歌にも
ハきゝかたくわきまへねハ之いふべくの先をさらく。倭歌の部立を定むべき。然
比興の三をは倭歌の體とせられは先ハ是を述侍らんか。さてまた一
代集の歌大かたをすべて風景をたゞ情事をのべたり。比興すくなく稀
なるか。八十よ八九を賦といふべし。中に比興の體もまじりて八見へ侍るが
仁徳帝の御即位をいはひ奉りしめでたく。



難波津にさくやこの花冬ごもり。いまははるべとさくや
この花とよめるは。秋宮の御子のさまを出しゆく。秋宮にたてまつりて
なんとしければ。其事をまさしくはのべず物に儀へし事をよろこびて
大空ハてりもせず月のきよけきハ。雲かくし時とも。詠ずけるは
とよめる。かの在原の世よをうちはれなかなかおなげきそ
おほかたの秋の木草の下葉。おのれやはなさ。詠もすなれ。ふる人なし
とよめれは。おのがのをさらく比して。物ぞをあらハされ。歌
類の多くも。静かに比の體にかなへり。人丸の言のなかりし
くわしくはもらしおく。
先家の古今の尾に。尾のなかりし妻戯

稀なるあれば類のかぎりなく侍れども眞かるべし。うんとかるるは
上の句は山高き尾をとくいれ起してかぞへたる花句よわるく。其
外世の人々あれば旅は月うち痛く老よげれとかのげきく。
おくてれや旅はなれうきやとかれうくも秋を老よげれ
このかのとまん。義成は世をとみうきとしてこそ。
あ鬼のさうくへ入れ雲。あれはの世をすこかるき。秋をかすう
ゆとかやあれば侍る上は句よあれはこのをきくいれかうして。あの句
あくあるとなるべ。侍まる鳥は體よかなるるとさるとてと和このハ
をあるとる風雅頃のうちもなく。侍は鳥の體もさるるうのうれ鳥を
こうへるこうとは。後の宮義を深考侍りて。あく歌はさ侍をいくさ侍く。



詩は六義とかを義あれ侍くかくこうるるもさまハ侍は六義を侍
は宮義。哥の六義は賦比興と。格別ようくあるを侍まくうれ。倭
歌は賦比。官職律令は比まあくも見侍く。家物あく漢唐を函
なくれく建るまよ。五編ようて名実齟齬をるまは。詩の侍を
倭書をうく人々を強く奉令して。其誤を伝はせんとれ侍くは
云道はあるるあ信以傳信。疑以傳疑といふをうくれ。そ此のは
侍は侍はすれて。明達は編ようくうくれ。

他文を讀書はあるを

後教月あるて。侍るれ家今をかれ。家月倭歌唐詩の
まくあるくあるを義とある侍る。他倭歌を。秋名あときのかるて

学文なきものハ必しも自からよむことあたハず。詩も必しも自から
作らずとも。古詩を吟詠しても襟懐をのぶるにたれり。文
章ハそれとちがひ多くの作をよし。今聖賢の書をよむにも。文辞に
あらまく求る事なくんハ文辞の法にくらくしてハ。其蘊に通せ
ざるのみならん。其義を誤れる事もあるべし。其上孔子も辞ハ達
するのみと仰られ。自然に文辞を以て書を解し。義理を得し
ゆゑも。其法を志らしてたゞ義理をいひまはする事あたはぬなり。
今の我等のごとき此晩進後生文章を学び候ゆゑに。いかに文辞をよくある
ともいはれ。学問もしてやよといふべし。翁が若くひろく渉猟をこのむ人にいふべき
ことハ。身をよくし。諸学を広くよりと捕よのことハ。あらく



作る文なとハ。後世拙なとも。其才にすぐれたる事からの大きなるに志
多かれバ。むかし後さも信ぜられしは。翁いとけなかりし時。小倉の百首
をよく覚しより。和哥の才なき翁も。はじめ歌を志す。其後すでに
継ぎて。文詩文を好むゆゑ。色々にて多くの年月を費しけり。今まで
くやしき事に。おもひなりぬ。すでに七十にあまるまでも。されハ月を
ろふすまで。いまだ世に知られぬ。まことに法きくおもひなるに。和哥
よりまた詩をおもし後。詩の道に文章と文もとしての思ひ候ゆゑ。翁
が自らくやしくハ。義理ハ得がたき拙なく候ても。義理の事ハ。我
邦の人ごとくも。かなにおもれ勿ぎすもあしきに。後程に宋明後儒の説
をもちひて。是非し。その及ばざる所をも穿鑿するなくはなきや。た

たゞ文辭を飾るのみにして常の事をのべ書を講じ
て新奇・類例にしてよろこんで師を求め・老師宿儒とうやまひ
よろこぶ・これを要する事・從容として淡泊にして・況や多くを渉獵するにあらず・書
をよむもまた雜駁なるべし・こゝに文辭ばかりを味ひ・こゝに文章ばかりを
自うして・徒らに文章も・辭なほたゞこれを塞ぎ・或は奇險を務・或は怪
僻に渉る・自うして古文辭と稱して世に傲まる・大うして人をあなど
事なくして・富商大賈の已に貨財多きに倚りて・籍繆家
世風流を・まねぶ・海筐名物のつかさをあく・紛々うしぬ
べし・しかるにもわ事・かの如きこゝろあるにて・ほのぼの
ものよ・ほのぼのとなく・ものしきさまなりて・ものの泥あるべし・又は吃

すれば人のこゝろをうごかすこゝろ・さかりなるこゝろ・文をなすものの
名をもて・三家・法度・名をもて・かれ・今・古・繫を・編む
やがて・漢唐・宋・元の文を・續く・其中に・文・法・を・とれば・去
こゝろの・文・韓退之・原道・歐陽永叔・の・本・法・を・最とす・其・柳
子厚・三蘇・王曾・曾・鞏・古今大家と稱・すれば人の文章を・見るに・平易
條暢・なるこゝろ・はいとこの・今人の好む・所・倉州・滄溟・の文・ものの・詭
異難渋・なるこゝろ・やわらぎ・文・は・韓柳・歐蘇・なれば・李杜・を極・あるこゝろ・
こゝに・宋明・諸家・文章を・論ずるに・韓柳・歐蘇・を・宗とせざる
ものなし・況・後象・文章・論・論ずれば・ぼう・遠・高・なれば・初・より・意・を

章法句法抑揚抵挫のよろしきの沿革を粗熟して後代まで其
むかし孫莘老歐陽公と相識る久し。或時莘老問ていはく文字は
たゞ一向に歐公は文無他術唯讀書多則爲之自工世人
之患在懶讀書又作文字少每一篇出輒求過人如此方有至者
無病不必待人指摘多作自能見之翁はたゞ歐陽公は言平
實にして味あり文章をよむものはよくこれを知り多し義理
文章はよくよみて仕こなし捷徑もあらんとおもふ歟しかるに文
とは別なり始て其法をしる。多く讀書すれば歐陽公は言我を欺
こと事なきをもつぬ歐陽公古今文章は大家にして其言かくの如く其
上古人の書よりこれをとのあるべきなり。



はたゞ文章のみにあらず作法をもかねつ。又韓退之答李翊
書。柳子厚答韋中立書。并に蘇老泉の上歐陽内翰書とはよく
知られたり。之は作法を著作にもとゞめて後世に遺せり。幸なるかな
とも云へし。後世に学して著作を送せて幸なるかな符節
とも云へ。せるなるべし。さはれ韓柳歐蘇の文章はよけれども天授の
材とはいふべきなり。讀書よりして得べきなり。今吾黨の文。文
辞をなすにせよ必ずしも文章をよむとのみにあらず常に多く
の辞をもつて其ことをなすべし。行ずるにあらずして古文辞とのみいふ
ことは。今の人多くは躁進にして久しく潛思讀書をなさず
常に既志著作にして多く自ら文を作るべく師友に指摘を求ざ

とのごとくなる因なり。されば指摘の益は大體文字程よりて
中より一二の疵病を除き、又は彼此を於此とする類なり。今率爾
みて不成體の文字をとるべき理なきは、たとへば求ることあるに
結構法度を失ひ、材木の偏を失ひ、或は堂を後にし、宇を前にし、
或は棟を梁にし、梁を棟にせば、一向に作者をうしなひ、たとへば
つくづくと、修補すべき所多く、空しく空しく、傾倒するにあらずして
また、今後世の文字を指摘するも亦かくのごとし。驪黿の如
無窮なるべし。されば、その作者をうしなひ、その他
の切を續ぐごとくなり。古文辭を學び思せば、必古人の氣
象を古人の作者を見るべし。我が心を脫澤せざること、時に參揚



すること、文の初めなり。されば先儒もまた、著作を一向に廢せよとは
いはざれども、七八の力を作るべきなり。二三の力を作るべきなり。
かくして、自ら辛苦すれば、韓柳歐蘇、たとへば、文字を作るごとく、
自ら和して、文字を作るごとく、熟して筆法、自ら明らかなるべし。
滅ぼすべからず。晩して、遠しとしてをきのべし。

多錢善賈

座中、先生、文章、世中に續書を要とすれば、ほとんど、
書こそ、文章、世に落ちるべき書なれば、もとこれを、
きくべし。韓退之の進学解、規をとる作を擬するの書なり。
上、姚姒よりて大史所錄、子雲相如よりて、柳子厚、韋中立

こと答ふる書よりしるす。行書を肯ずして太史公より、二子、法を
も規固以下を取るべしと云へり。さまと韓退之の答李翊
書より、代を漢の書よりさまを敢くよりたとへば、西漢書とハ
すてさとし。歐陽東坡すとこの行を見人まくわるとハ古今に
書によるさらハなり。ゆゑに歐陽の韓文を学ぶ。東坡の言を学ぶ
ものとしるべし。多識見功をこそ。性のちっきよりて悟入する
ものあるべしとて、ちっとも南豊陳無己より伯夷伝を書くべきよる傍
ひ。全己そもそも文法をさとるとかの人多をかくのごとし。今
伯夷伝をよるさとる人をのし。まことに文法を悟れ者やちっきに
帰化の人舜の武茅之喩を掲るべきに東坡潁濱こちっきに父老泉

なるべきに常に一書を枕中にそなへ、おくにあるべけれ、弱く秘して足
せきやとし。父のこころねをよりてこうよるべしとて、ひとまハ二度あれ
ひきかの書をもとに。老泉の批点を学ぶべく世に伝へしまときに
老泉の批点を学ぶべく世に伝へしまときに。
さとわるべし。老泉の四字を伝へしを奉ぶ漢の書をよるべきハ。
と続く。格へ。行よりかく。老泉をとこ。ちっとも多銭善賈長
他を辞とし。文章も多銭よりくるべきの。他を奉ぶ漢の
書にくるべし。卷帙浩繁にして。吾徒の材力をはるかの。捨て
うるべし。そもそもくの学をとなく。文章辞を見類を勿論よ
く。老荘屈宋。伯淮南荀卿の書。さて丘明の國語を伝へ司馬

遷が史記。班固が西漢書に極めて高し。唐宋大家の文を熟
読すべし。是も全集をよむ事はおほかれば、其中より茅鹿門が批評
あるものは、尤よくおしへぬれども、八大家の文をよみならへば自得する
ものは、明朝諸家の文をみるに、古をまなぶ事を好む。體製衰(たい)へて
生ぐ新(ス)を好とするあまりに、奇怪相競(きそひ)ひ、獻異(スヲ)を以て誇りまた
みだりに、これ説二於海一を為の文を是学者の謂なり。さまハ義理
濂洛関閩の学が文章を韓柳欧蘇に到りて、ここにやかましき風ハ
後世学者のわろきところを背りて、すなはち此世の宿儒を排
するに、己が麁浅猥瑣(こさ)の文をもて、みだりに韓欧が文を非毀(ひき)するもし
甚待る。ちかき義理も甚だ行のごとく。韓ハなほ義理をあやまる。欧陽ハいふに



文辞を解せぬものと称るをきゝて、あまりかたよりしが。むかし韓退之
文を作ることく人によく仕へく。人皆ハよく論ずれども、人悉くハ十の文ハおさく作
人のごとく論をなさんとするより、その書をみて虚ゝ。荘子も下士聞(テ)レ道(ヲ)
大笑(フ)く、不レ笑不レ足三以為二道(ト)とあり。是人々わきまへ知る人によくさとす
ぐ。つゝしめ。韓欧の文のこときを志すもの、程朱の人にさかふハ韓欧を
するにあらず。是も程朱を識ると同じく、よき人のうちにはぬるす
わたくしも己が学を志すものの甚しきといふべし。古人を学ぶとする
ものは、修むる学を後世に貽さんとおもふのみにあらず、是を学ぶべし。

文章の盛衰

むかしより、古今の文章を論ずるに、西漢の文章ハ奏疏(そうそ)

割策の外。賈誼の過秦論。司馬遷の答任安書。司馬相如の諭巴蜀檄。揚雄の解嘲。此類枚挙に暇なし。其文大抵雄偉高邁。後人の及ぶ所に非らざるなり。東漢以後。文章衰弊して振はず。初唐に至て。俳偶を主とす。唐に至て。規模廣盡。氣象蕭然。卓然たる一家を成す。唐に至て。その作為。ある除。さほどに。韓退之柳子厚の二子。ともに起絶の材をもて。一生の力を注ぎ。古今の文を陶鎔して自ら機杼を別にするまで。其文上追西漢。殆ども。ほとんども。東坡の韓文公の碑に文起八代之衰。道濟天下之溺。とかたれり。道濟天下之溺。はもちろん。文起八代之衰。といへども異論なきまで。但こゝに東坡の二子相繼て興



振起せり。文章ありてより。後人光照。公大文起。配韓柳。と羞さらしめたるまで。韓柳歐蘇を文章家の大宗とあがめ。古今文章を論ずるものは。必ず此三人を服膺するものあるべきなり。明朝に至て。初は文士多く出て。文章世に盛なりしが。劉基宋濂李夢陽何景明の徒名を一時に擅にし。大家と稱せしのみ。韓柳歐蘇の文に及ぶべき。一人も雖無之。おもふに。慕尚して。欽服せしは。其文章を。唐宋之間漢中の徒。各一家を立てしに。韓柳の遺風を。歐蘇か。波を揚げて。著わされたる文章は。時運と盛衰する。為にまぬかれず。明の中葉より。後稍々衰ゆく。往々平易なる。鄙俚とかの。簡

古文の人々剽竊とかのこゝろをもて文章科巻帖括の習ひ
流くそゝと時文と称せ〻ひ古文と名づくるまに〻かのもてあそ
ひ阿ひよせく古文を志われ人世を学ぶ〻ものもして後古矯俗を志ひ
韓柳歐蘇の文とこゝ〻赤幟とせ〻ひ篇章に揄揚し句ごとに只
藻せざるなし。志のあまと材識ことに蘊畜深くこゝろざしなる
くこの要代文と人ひとり古よりの作ひ雅よりの作ひ雅よりわれ最
後に李夔龍と世貞ありくその平蜀よりく膚俗よりつきに厭く
相憐よ奇怪の文と造作し。杯觴に論と縛張し。洗洋自恣ふ。
一世と鼓動せ〻ひ人皆方の文士靡然〻ひ依せ〻ひ流ひ號して文
豪の名と盟と称しきさる人論滄溟鳳州も常に韓柳歐蘇の文を



褒称して終に邪論を斥きの人鳳州も晩年の作く文友と文
と論して後悔して曰ふこゝろ志わ〻ひ及ばざるとけれ
ども。錢謙益の列朝詩集に見へ〻と言へる今文章を
こゝく自のゝ作者人のまに氏の無作を拾く彼の四部稿を作紙
やすと人人人又風列のゝ人のたゝれく反く韓歐を毀るこゝ〻と
を得ゝ〻ひ人人人皆やく作ひきてこゝろわれふ〻ひ人義のとゝふ見
やく志人人きあるわ〻人。

昌黎大師

今文あと新しきすまわく世ゝ人人一義理の大筋を
志ひ名きこゝろのやく於やゝあまとゝのを今世儒者さて人名れ

義理をもつぬるものやあれば行ひのるまをもつて。さまざまに煩雑なる
あれども。世を拒儒と称する人も。義理の節をもつぬきくも
人倫を。孔子の君子は義を為質とし。君子は義理を質とせざるはなし。
のたまひしをもつて。ずいぶんの事義理を質とせざるはなし。
いざんや文章は質あるその文なるをもつて義理をもつぱらとして。浩瀚
机雑なるを文章とせざるをもつて。韓柳欧蘇の七人。ことに
文章科中の人なるをもつて。ことに深き義理をもつぱらとして。
義理の筋をもつぬく人中なれば。韓欧蘇あるいは
つぎの人なり。柳蘇は叔父なり。柳蘇は洛学に仇となるをもつて。
叔父なるを柳蘇は叔父の学をいとふ。蘇は洛学に仇となるをもつて。

君子なるを。賤称せらるるをもつて。
すなはちあらゆるその文を。人倫を必義理を根據として。識をもつて
中の柳の文を精深雅健。平易。氣格あるを雄拔。けだし蘇の文を
議論振奇。記敍明豁なるをもつて。確実なるをもつて。拔群なるをもつて
韓欧を配して愧なるあるべし。明朝の弘治正德に
こ[illegible]ばるべし。文章と義理とをもつぱらとせざるなかのみきとして。博
風を傲ぶるを文詩を馳騁して。義理をもつぱらとせざるを文をもつぱらとす
その弊を矯飾して。文彩月を驚かし。変幻百出するをもつぱらとす。明眼
の人一たび見れば。その猥濫なるをもつぱらとせざるをもつぱらとす。滄溟
風列等の文をもつぱらとす。義理をもつぱらとせざるを文をもつぱらとす。
二程の人を考るに。牧率粗俳

みて、爰に義淳法師あり、八歳にして父を亡ひ、なほよりて父を亡ひ、
母はくるをきまをもとめんとて、大概をつくりたるに、二子莫逆の
交をなす。日来徴逐して詞戯をもて相侍る。中原二子をもて自
ら新をよぶ。その顛狂恣雖しく、ときどきに狂なりて、風刑
の父を怖恐あるを誣告まく。下獄論死せらるべきに、風刑
茅世懋と同じく棄官して長安に住す。父の死に代らんとこひ
このとき、かなたさしたる、號泣して柩を負て帰葬をなす。
ちまちはさんの事をもて、ものいはんとすれども、
不安とかなしびけるに、又ゝ滄溟もん病中に暴卒せり。
浪笑数友もなくなりぬ。狂は志氣沮喪ものなれば、忽ち故態



変して釈氏に帰依し、伽藍を建て、又弇州園をもとめて、日
来賓客と其中に宴游し、歳月を放過しけれども、なほ[illegible]
やはり、社友を錫爵の女法丘尼となるべく、性澹教門を立て、
風刑ひとり生涯をもとめたり。甚尼をもて曇陽大師と號し、錫
爵と同じく結廬戒食して、賓客を謝し、業砌をやき、
朝夕梵誦をのみ、ものいはずして、希有なるものとなりぬ。
も無尽、やゝ久しくして、宿好を忘れ、まわるべき、又如く、詩人酒客
の間にあはれびなれば、狂なる才ありて、名をあらはす。風刑の為
人を考へ、病狂衆人の人に似ざるを、博風宏詞名を竭む
よりも、同伴合汚衆を収めよとあり。其時に当て、地[illegible]

るき。海道北虎き。海内北人物と鼓動せしこの八まち仁の裏邪北
沈よくく天下を傾けし。後をきこうきれ和なのとかくく世の論著
陽明と並び称して一代の盛まかし。義。あるく孔明朔乃
学中を二とる。義沢の学中を陽明と学。文章北学中を風列
と学。但良知北を内崔存北更と係く。儒者分内の事
と離まる。風列と知くを名検をとゝ規矩と破て多く文雅風
流をとくをとすとこの害晋の清談と似くなる。きこの
とゝ世。今世師儒と称して北を孔子と編すと。学を名
学をたとくをとくを道と志なるこの八二百載の下風列の聲威
をうけて。世なと投し時年を收んとするを。ゝをさゝき棋なるし。

今其師といふ。学のとゝ。孔振して文章するときゝよりは
ゝの世くを大をし道を治を北学を撥し。文を編をこの八韓欧
と駕し。国ゝ半耳を執く一世人なきやに。ゝ北しみ
蟠を龍世貞ゝ命を髣髴をゝ。ゝ北学を作るとゝ。
寸識人をし行に
後数日をして。熟ゝ事命せしゝ。後を来日文章北ゝあを績
色き書術ゝ教ゝをして。ゝ北をゝ。そきをつき績益たきを北ん
右術学学の書八。我学るとも月し後壊ゆく常を沢ありゝ。拙を
ゝ。今改く文章北ゝあを漬ゆを。ゝをゝをゝもゝくゝやれ
ゝゝと。ゝ八。ゝををきを八ゝ北ん学きをゆく。大凡書を多読を

しといふ。ものもひろ巻万巻に書籍ゆくもの書よこと
を精考せ其多くこれを考へ繕ってたれの益を
うけるくに寸鉄人を殺すとく一寸に強かくもよく能人を殺
よ多し。長刀異多しと云ともかなまっても用よたる事なるべ
むし東坡月うつ西漢書をうんしまれいよ治道人地王
官制兵戦貨材の類一過みとおもうつ一まをとかめうた。殺
遇を待て事く精敷なりとも。虞邵庸元をもて今
教く読書の良法とし。今此法よりさらに工夫の弱た作
遷固の史も文章に為とうん中に義理事実を貪ることせた
多く文章に一筋をうとかってよしとし。志を分てあわてを当



一なるつひハそを精考すなとに成えかてし。そもよつきく毎月ごと
日法をもて待ふうの一よ字例。文字を用ひ例なり。ものくハ某乃
紙わたのあくし。参民同しく補ものも其月ハ実なるく。琴連
同しく深なるものの用ひ実なるし。文字も亦志なるし。勉字勢
字同しく法とむるなるも其ものも異なるし。情字敬字同し
くたく志むるものも其ものもちひ実なるし。すなくく表別同別の字皆
其同意を兼すし。そし同別よりくく其同実を兼ぜしてた。
ものもひ強きを志ってし。必用ひ誤まれ
ものも多し。其の文字も一字あるハ一字に紙わたる。焉乎
哉矣に助字よりもく同実をやもきもわきて。ものひ

もく疑似するもあり、とく古人の用ひ例を引き考へ此
をかんがへ考へ考へ考へすれば、其語類字かくのごとくして成
語をなす、其類一なるべし、改作より作る語あり、変成より語あ
り、人性行より作る語あり、事物措置より語あり、古制より
語あり、比喩の語あり、其中あげくいとくべし、必一も其旨をす
べくなれども、其成語を多く記して、其中より転化
せり、おのおのうつり推みて作なるべし、其こゝろ
鋪叙作を鋪く章段をなすべし、那分類聚のごとあり、交
互錯綜の所あり、を殺るの虎、言を布の贍、きをうる
ゝ、其中を體裁鋪叙より貢尾をなすべし、組織あり、



承接あり、転折あり、収結あり、文勢抑揚頓挫條貫此淳
厚なるをもとめ、古人の法をとるべし、況先とよむべし、加之
歳月此功をつもるべし、おのおのうつり自慢するなかれ、学をとし文
るべし、用字に誤る造語よりやしなひ、鋪叙作を體裁に
言を多く造を論するの助けとするなり、そ一作は文字を
そなへ、そ一作は言を尚のまとせり、浮虚無
実此基きとしつもり、此文雅風流を造すべきものなり、
そなへく異なれども、今かくするも人性邪を納りて、
然も其邪なりとせば、今世の学者、多くは作後にして実行を
ふとせば、多く文辞を馳騁して虚誉を求めさるべし、作りて

俗儒なる者なとひ痛く懲しめても猶あらたむへからむとし。况や道ハ文
雅風流にあそひの玩ものとなしいさゝかなるをや。誰かあひ率ゐて去らしは
さりとてき見え道をなす徒にあらねハ文章にあらぬ徒にあらすといへとも
文辞ハとかくよろしき徒にあらぬ文章にあらねと、されハいかにも夫子
の文章ハ此徒の為の威儀文辞にあらさるをいかなるや。今たゝ
に文辞をさして道とするハ玉帛をさしてくれとし。鐘鼓をさして
楽とするに同し。されハ孔子も禮云禮云玉帛云乎哉。楽云
楽云鐘鼓云乎哉との給ひし。翁も聖言をまね似て文といひ章と
いふ文辞をしもいはんやといふへしとぞ思ひ侍る。
言を身の文

翁がいはく思ふに字書するとおなじく。言葉をつゞけ連続をゆ
身とおなじく言葉係るに依の撰抔をなしてよろしく之ハ辞としてつゞきを
文字ニ字とよるにも之ハ文辞とハ志を言ふと云ふハ言語文辞同しとあらさ
るし。後世文字の辞を文辞といふも事起りて文辞ニ限りて文章をと
いふにより古言を失ふなかれ。身にふれて文章の、おのつからあらはる云
事を文辞として其の修辞を学ひて事をとるより、古言ハ修辞の訓しみし
てなるハ孔子もいひしも君子の枢機栄辱のもとといふ。子貢
も君子ハ一言にて知とし一言にて不知すといひ。南容ハ白
圭を三復しなるにより身の文章を云ふに及ぶかき
ハなし。故に之推の言を身之文也といひしぞやすく書ゆるはわさ

ア[illegible]ムといふも世儒者と称する人多くハ浮氣にして鄙倍
とをきくるまを志し或ハ大云を憚り戯謔を好み或ハ女色
を貪り貨利を議し高きを[illegible]に委巷の旅れとく奴隷に類
より低きに文雅風流安ふ[illegible]ハ[illegible]を着て
琴を鼓し笛を吹き古人の文雅風流と[illegible]買櫃
還珠の類なるべし[illegible]文雅風流古人に似ずとも優[illegible]
孫叔敖とまでハいはず況やあきらに似さるものを雅[illegible]孫
叔敖とすべき[illegible]中よりハ長家山鹿の行ふ[illegible]世に古
今論のまとをなす所なるべしいやしきもとハ[illegible]
なるべし今論をなして付[illegible]てハ[illegible]



といやしめ物すべきまあらんそ[illegible]
[illegible]きくさ[illegible]
兵家利害[illegible]
おとなるまハ士[illegible]義理を大切なるべし[illegible]
し今論を文[illegible]
生死の場今論のまを[illegible]
[illegible]
はたらひすれ[illegible]
いふ今論の[illegible]
[illegible]

命をいくるとて、ゆるすべきまでもなかりしかども、義を守りて
塵芥をもかへりみず、ただ古井道のみ、ちんや金帛をもとるべき
ことなりしかども、常に分外を表出をけ、金帛も
あれども費し用ひさるべきまでもなかりしかば、命ぜし
金帛をもいくばくかとりて、商賈のもとに居
ありくに、女中おのれすきまなかりしかば、小次の書あり、足
唐代柳公権が家に入りて、婢あり、柳家とて
揚巨源が家に行きて、夫人婢を買わんと、自ら牙儈が
價の高下を議せんとて、驚疾をなして揚家を謝
去りぬ。其後人ひとりして、柳家にあり、後に内事



に自らあずかる物に價を問ふ事まれなり。夫人
牙儈と價を議せんとまでは、きもをつぶしたるなり。
疾を得たりとは、いとかりそめなり。柳氏とは、唐代世族なり。家風
いとさかしく、新進の家とは格別のものなれば、さまで中唐代
にあり、中ごろにしきまなるまでは、いとやすく、世にあれども、
我朝にて君子国と称せらるる中たるに、風俗淳素
にして、貨利を知らず、義を尚ぶこと、かくのごとくなれば、
ものいふ廉恥の風も、ひとしなみなれば、義を守り世
をなるべく、風俗おきて変ずることなく、古の者を今世の
人常に、ならひとして、古にも倹素質直なる、驕奢

うりとき、くるまきはくもしーうなるとわれ老人の物うりとよ。胡
鮮陳の時根生徒中ち新鮮使よりしう家負して支
度やすこのうりうるを小之好新奇つとくくまの如水あり銀百枚
をうりけれ始終て後新奇つ同じしてめちのうりく一枚を
いひーよ如水対面して去なくわうて人をよびさきにいひ
鯛をこ枚よおいて甚肴をうり今吸物ありて、ちせといふと
古人同くうよ言くーけれよ酒とうくくこ好酒とうれりて
ちーちっけ如ものれ初よりかーぬ人つかくちなーー合力するうなな
ーーくくーーこーーかるせるるるるーてやね飯食のまーー
くくーーー鯛をもうくるくるくちけ古ちけ古ちあ共まくくーふふ



ちーきまくくる異けうーけ、さくく朋友多用共落中ち流石故をうーー
ちーくくもちもくくけ完結共まちくくも去時代の古共風俗後素質
ーーー

其子恭人といひし者は翁が七友なりし其父宋女くの子なり
ひしやうぐ八人と為せの負く息とすら事世にあれ事なきこと
も汝等必ずへからん。かゝ負けるも彼に勝あれぞすし。さし加へ勝
く我は将あれば。碁象戯に勝負れやちらひくを世為の
なりと徐々としてきんやさく生とへ。当世ある人と為をかれらく
かくへのちら負りとよ給ひ。又をゑるきぬをいやしく買ゆく。介を
おしき人るなの所。いかる高貫此とさなして古を者のうち
くいなのしきさとなの文先生新井筑後守のいひしを覚え給ゆる。
人の院をいふかくきたき人もさしいふしきもの。今語り
さ人をぬ達八。会まをいふかくきぬわるへしときまてら意とそれ臆

病の唐名とききあてぐし。侍講のとき
文廟へもやとけおもく徳あらし。むかしはあれ事なき。さまは
古を一名此上下も人を徳けく。利欲臆病なる文盛る此れ筋のことを
いふれば無擇言をそてあらぬ此るあれもいふ文会を。かの世儒
のいふ文雅風流もなつまとゆるは道は中路にと云ふる遠からし。
今身のなり行をすてく徒に文辞の事をともみて。聖賢の道へ
こゝにわれとえてまる所の正好に僻して。自からそ陥く事を
知らさるなりし。去れども学をうるを後生を誤るを為ざ
けらし。金詩に、ごく。誰生厲階至今為梗。などの謂なり。

一日の澤

冬もやうやうくれなんとすれば、空のけしきすさまじく、
雪もちらちらみだれかゝりて、つもる程に、日もすでにくれはてゝ、鳥
羽玉の闇さへいとゞものすごく、かくてあるも物うければ、よそにも
身はさながら夢の心地して、いかにせんとおもふ折ふし、
鐘の音もきこえて、名残おしさもせんかたなく、
いかにせんと思ふ折から、かの人も窓のもとにて、
まちかねたる心ちして、風の音さへ身にしみて、雪
いとゞふりつもりて、庭の草木もうづもれて、
まれにかよふ、よもの山の端もみえわかず、人間世界さへ
このまゝ白妙の、雪にうづもれはてぬべし。



池のみぎはも、しら雪にうづもれて、波の
うき世のさまざまも、さながら忘れて、さてもかの人
文をおくりて、心のうちをかきつくし、
またかく文をかきて、思ひのたけをいひやり、
侍れば、いかにせんと、雪の夜の明くるを待ちかね、
ちかひしことの葉も、かの人の心のうちに
おもひわびしく、わかれし人のことを思ふにつけても、
文をかく事も、いまはかひなきことゝ思ひて、
一筆の口惜しきことゝ、いひおくりて、思ひ
捨てがたき身のうへを、いとゞしのびて、かくてすぐさん

まかりくだりてみやせんとおもひしかるに。使者はしりきたりて申
まうしきたる奥よ。
なくよろこび。やがて手紙のふみをもちきたりぬ。かゝるおもむき
まゐらせ候へ。かならずしもかくまで親しくせし候へ。
思ふところあれば。ちかく来りてのちも。そのほか誠の志を思ふ
をりふしにも。ひとりかくて其日をくらし。猶よりかかりて門を
あけ。[illegible]人として訪ひもせし人。あらはに文を寄せし人例の
人は。情深く。事に依て形のあらぬを没（もっ）しまして。翁は申し
くさむさ忘れて出かゝるみな。猶もあひしに酒燗（あたゝめ）て
出し。さればにや。我もみれ詩を鈔（せう）して。清談（せいだん）いとゆるやかに尽く。

翁
あるじすみれのやどは。ちゆきのごとくきわやかに。たそかれや
君まつ事ありて待ちしは。これ（ため）ちかよさのあしもとめくわしく
あるは。かたおひ待ちゐれども。そのかたちを見もおそれ申しと。
戯（たはぶれ）あそびけるにも。程を経にける。良友に会ひて。翁のうち
歌（うた）のうちや。いかに多くとも。翁に燕（えん）を設（まう）けしに。翁いやとよ
むかし雪月花の折にあへば。ともに詩を思ひのまゝもゆかしく。今に
花のさくごとに。詩も久しくすべて絶ち候ひた流（る）
よくいひおきし事もなく。まで久しき志をかくて待ち
まい。いかにはやくもまゐらせさふらふ。と挨拶して。

家住駿臺下門臨萬里流隱雲平野樹棹雪遠江舟
吾老愧安道客來皆子猷草堂偏閑寂喜共故人遊

[illegible]

冬天衝雪到君家此日倚欄眺望賒兩岸水寒如夾鏡
千林樹合似開花

又

天從雪後海寰新積素凝華先入春清白東來誰相
似草堂高臥是何人

又

欲向駿臺臥雪時行吟招隱太冲詩古人高義今何在
此地無君誰與期

又

前の約の韻を和して
高堂幽僻地積雪暗長流歸騎迷來路漁人滯去舟

行藏論古道經濟問嘉餓寄語世間客誰知塵外遊
そとさかと迷は喝わ〜げれ かくて酒酣よ字のれ狂よ歌よ今すゑ
〜あ〜ゑんとてのすん字〜げれ 在中よ世よ紛れ〜散樂よ
謠よのき人わ〜〜よ 義真人よ一曲とすめ〜こハ肩上の笠ゑ云
影の月をうつ〜ゑ 擔囊の古ぞ中不香の公をゑ折ぬ〜や
こ〜ゑわ〜げれ ゑれよもつ手〜〜こ〜げれ 義ゑ聞きて わ〜
よ〜ゑて思ひよ〜ゑ 山家の中の第氣ゑ入る手〜よ笑ゑ侍
や〜〜供リよ孫〜

六出苍理三徑平忽聞白雪入歌聲市中賒酒酒家近
堂上開書書帙清玉樹玲瓏四隣合銀沙的皪一川明



棲何減山陰興莫厭留談到日傾
翁諸客よいひけれ 律詩ハ文字よ〜ちひ〜〜ゑ号要〜
ひ〜ゑ きまりえ〜〜 相負ゑ相負せぬとわ 又一字よ
〜景趣をすすれと云味わ〜 自作よ新〜〜
〜〜よ〜〜 たば〜〜 ゑ〜〜 結句一句よ平字ゑ
〜〜ゑ雪ゑ〜て三徑のきゑ〜 ゑ〜〜 ゑ〜〜
半二句よ入字眼〜〜 法華よ譬と白雪よ曲よ
の雪よ聲よ入と中 ゑ〜ゑ 句よ合字中 〜〜
中清の樹よ 〜〜 〜〜 〜〜 〜〜 〜〜
銀沙的皪 〜〜 〜〜 〜〜 〜〜 〜〜

八句まで結びつけ合わせ字句を[illegible]して律詩八韻字句を[illegible]
他の句を其の中に世間の俗と作り者一句を
以て八韻とする法なり其韻を[illegible]
韻は苦しゆと言ふて[illegible]其韻は相違の字句八韻一
句をすきとこそ[illegible]他韻中に他韻を[illegible]
[illegible]唐詩の韻は[illegible]唐詩を学ぶ
[illegible]思過半[illegible]詩の余義[illegible]
[illegible]今は[illegible]
[illegible]貢大蜡の
[illegible]一郷の人
[illegible]

やすきを[illegible]百日は蜡一日の澤爾[illegible]所知あらんと作り
[illegible]民も四時稼穡を勤め歳終は一日酒
宴楽して百日は労を忘れ遺澤なり民の
[illegible]は[illegible]して相ともに楽しむを[illegible]
[illegible]貢は[illegible]
[illegible]酒宴楽して一日の[illegible]
[illegible]蜡の[illegible]
[illegible]
[illegible]

澤ヨ答揚シテ不報ノ報ヲ爲ル仁ノ必ズモ富ヨリ出ル職ヨ
行ヒ難キ事ヲ國家ヨ報ヒ奉ル、ヒトヤ。

## 物人ヲ推ル

夫弱冠ノ子孫ヨリ出タル仲夷ヲ稱ク。叔向ノ母ハ丈夫有リ物
足以人苟非德義則必有禍トイフヨリ。竦然トシテ
戒慎ノ心アリ。ヒトヤ。亀鑑ノ名言トイフベシ。ヒトヤ。德義
ノ移人ヲ。伯夷ノ清ノ如ク。柳下惠ノ和ノ如ク。方他ノ風ノ
如ニ。ヒトヤ。ヒトヤ。仲夷ノ風ヲキク者ハ頑夫モ廉ニ懦
夫モ志ヲ立ルヒトアリ。柳下惠ノ風ヲキクヒトハ鄙夫モ寛
薄夫モ敦シ。人ヲ推ヒトアリ。其極ヒトヤ。羣ノ部孔子ハ



聖ニ方ノ同ジカラザルヲ部ヒ。ヒトヤ。七十子ハ親炙シテ
ヒトヤ。其ノ忠臣孝子高潔義烈ノ行ヒ人ヲ感
慕セザルハナシ。其類ヒトヤ。德義ノ類ヒトヤ移セル
ヒトヤ。小キ物ヒトヤ。ノ禍ノ如ク。德義
ノ移ヒトヤ。人ヲ推ル儀狄ノ酒南威ノ如ク
錦繡珠玉奇獸ヒトヤ。人ヲ推ル
ヒトヤ。ヒトヤ。必身ヲ傷シ
ヒトヤ。必名ヲ辱シメ磨シメ磨ヒ。古今歴ヒ
ヒトヤ。詩文書机ヨリ。儒者ヒトヤ。

て又國風のうち李杜摩詰の詩韓歐東坡の文一ツ
の書のあとをうけそれも又古人ちがひ各一種の人を
よみるこのわたくしに考るに亦かはりて德義のおもあるに
よりて詩賦とはなく文章とはなれ人多くつんを投しかまと
すてらくよ寢處せらるるやうに云ふ光雄偉
と為すよ巡れ其文よ馳らせ雕鏤の巧を衒ふ多
おのおのの養ふのわたくしの道よあるくなるの得るあとのあれ
ばもも政物衰志をいつはりて最もまもるを
いまくの自ら為ふ所ちと知らるこ古人とと結成文章のあるも其

たるまよりまた詩賦文章文字ばかりもの為人ものなるに聲色
の為人ものちに必ずも有禍といつまるもの人をして虛
文よりせ實用を忘しむ道よ害なりといふこと新老泉
この高迂と論する之をもて文章を論じて文章を作ること
辯賦文章よりはるかに醫者の毒藥なるこのなるもし
其毒をして治病よりもまくの人を殺さるるのもしこれ
詩懷よりもまた文章に辭達よりまくなるものもこれ
ものまくなるに必其毒中を免ることを詩賦文章も一種
まもの人を居遠の材をまくしたるせんとせば必歲月を費して
その間の功を修まくるに韓愈の文をよみ事を月にして敘

とゝ[illegible]ゝ處若忘行若遺儼乎其若思茫乎其若迷と
いふ[illegible]ゝ嘆息して[illegible]ゝ韓愈ゝ為よりおそるゝ
まをえず嗚呼韓愈ゝ材とゝくんと道学よりもまかくの
おくせず聖賢よりもまさるべきよりあらんゝ学を
文辞の間よりとまとゝ巳よりまさるべし行ゝ柔順
仮博遺使の楽よりもを曠し渺々よりまさるべし時々大顛よ
動ゝまゝ[illegible]ゝ芸根源とあるのわれよりも文章ゝ[illegible]ゝ
所ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ程朱ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
とゝいまゝ[illegible]ゝもあるゝ[illegible]ゝ新文を禁絶せよゝ[illegible]ゝ
ゝ詩文の[illegible]ゝ[illegible]ゝ程朱道のゝ

慮ゝまゝの遠きを[illegible]ゝ思ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
のゝ[illegible]ゝ陪從ゝ又[illegible]ゝ刻戒とゝ[illegible]ゝ
中毒ゝ詩よりもゝ好楽ゝ[illegible]ゝ荒良士瞿々今日ゝ謂ゝ[illegible]ゝ
[illegible]ゝ仮ゝ[illegible]ゝ問ゝ[illegible]ゝ庶幾ゝ宴安の鴆毒ゝ[illegible]ゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

て乞ゝて、若已の家路よりうつしぬ。

年よりのうた

朔風戚々として日暮れ河志く、き雨も降やすかりつゝ、

蕭条たる草堂に、後月を待ぜんとて、ひとり打てゆくわれ、今ひとり

おもひ出るは、昔の人く、義の起居を同じくせしに、

今むなしくこの世を捨て、年の暮とくて世にさそはれ、そのはてく

こゝにいたれば、市朝より伏なすうち、義の草堂にて、

すゝ竹に、蕭然たる環堵の中に、月とやすく、雨と外して、月と

おもひ、雨のすゝき、年に、雪るゝ、見くれば、ざまに、雪月の

幽なるあり、むかしの、ひきて、年こゝに、甲斐も

なく、むなしく、年を、老年、徒に、朽果て、今

更悔くもあれども、あれまほしくゆくとく

なるよりて、分のいとなみ、老ぬれば、もんまもの

かなといふ古歌を、おもひ出て、年よりなくなりぬとは、

活ある用くむ、衛武公行年九十、抑箴儆於國、

く苟在朝者無謂我老老而舍我必恭恪於朝夕以交戒我

ゝ、抑戒の詩を作く、自儆ゝ、

とゝ、いまる、我の年よりあるとなり、今義さるもなり

月よ、年よりあるとなり、今よりく期頤のよくとと言く。

逝ひ、今は呂下の阿蒙なくしてよかるまもなく。

多年共に教育をひやまず〻〻しかるに材質の庸下なるにやすのこゝろ文にてあさらずよりて公のおしえをばづ〻〻
汗顔なるのみにあらずとは若輩よりこゝに共一面のことに
遂よりんぜんなるのみにあらずこれ後生相ともに勉強
して日夜進益をこゝろがけんとこゝろざすべきなり
やう〻〻に共効を得らるべきこゝろ
用ゐるべきこゝろ奇特なるべきこゝろ
て為の先名を顯すべきこゝろ衛に共五のまことをもて為をはげ
して佩服して忘れざるべきこゝろ共五に共賢
なるべきこゝろ企るべきこゝろ



老たる人に所ばとすべきまことにやがてかくのごとく春秋列国の人物を
論じておのおのに衛の共五大夫をもて蘧伯玉に二賢に道をもてまことに尊
をもとめんと為し皆聖人に法なり伯玉の寡過を願ひ未
能やいまだ十九年非をもつて二十にして化
すと云ふ共五に自儆我過を用ひまことを求むと為後相比
て自治親切なるまことに孔門七十子中にも
顔曾に如ものを多く得やすこゝろ
とこゝろをもさきに共
もの〻今も行人をして載のごとく奥起せしめ共老

あるいとも。今よりて謹く法君の教訓をすして。あはせ学ぶ
ところ。おのおのに法君のおもきを。春秋のごとく材力よたらず
懈怠なくして月々に進まば。古人に及ぶべきなり。
月々時々にあらば。材力ともとするあらば。たゆまず怠らず
しかして勉めて不息あらばぬべし。しかるに怠りて日を渉り一旦
年老齢傾くに及ぶて。後日の懈を思いて。いかばかりか悔ゆ
あらんや。即今の為に法君の教訓を思ひ出だして。
力老大にして傷悲すといふ。陶淵明も盛年不重来。一日難
再晨。及時当勉勵。歳月不待人と。古人も此感懐を同
しうせしなり。そもそも詩句時々吟詠して。勇進の志を振



起すべし。又世に伝る宋文公の命ずる文に。
勿謂今日不学而有来日。勿謂今年不学而有来年。日
月逝兵歳不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。
此文本集に見えず。孝子家訓の文なるべし。
孝子の少伯に文を送る人に擬作せり。名を孝子に託するもわろ
しかれども仮の作にせよ。言葉は直して意は明白なるべし。
もしくは自警のごとくなれども。常に忘れざれば
陶侃の語なり。大禹聖人乃惜寸陰。至於衆人当惜分陰。豈
可俟遊荒廃生無益於時死無聞於後。是自棄也と云へり
こそ。そもそも立志をの法とすべし。孝子の淵明の詩も曩祖

以来代々ふるそと思ひたる。おのゝ人とせまきくらゐを志ありとて
きゝ出さくは。色なく孔子の法をまなびやゝ業と回くわ果ハとに
惑うくきまわ。さる人ハ法者も。山陶侃の旅をうて自うら
激昂して。日夜勉せらるゝ。但学問を勇進をよろこあ
こゝろ。又色迫なれをきらひ。一生あうと離きねま
ゝく。色ハ色迫あて求ひきよ。ゝ解惰を戒く常ま
聖賢の書ま優遊涵泳せらきたゝ。ゝしてあ。ゝ進益あれ
ゝ。発むし加賀ゝ。ゝ時。士族の中ま紹鷗利休ゝ風流を慕
く。茶湯をなむしゝ。ゝあるいハ。ゝ戸へ。ゝ。ゝ時。道中茶をもゝて。道
旅ゝ。ゝ。ゝ冬をかけ炭をおきく。ゝ。ゝ回りの人ゝ。ゝ



うおすけハとゝ。ゝ中ゝ。ゝ。ゝ。

そんをしらく。学問を勉励と要とし。多く急ありて迫切なる事
たとへば義理を涵泳と貴ぶ。後ありて懈弛なる故戒む迫切
なる故懈弛なる故学者進脩に益なく。後急相懈怠す肯
うさるなり。程子の多くは志道懇切固是誠意若迫
切不中理則反為不誠。又曰人謂要力行亦只是浅近語這一
點意氣能得幾時了。諸君程子に云を見よ。為の説あるべし
とぞ。

壬子試筆に詞 附

日月逝て移く。白駒の隙過やすく。衰病日に侵して。黄金に
似かめく。さまで太馬に似たるも思さらく。



この頃こゝの老に成ぬる。年七十あまりの寿命
なるべしわれ。ちく。ちく。衰て病を憂く。くるしきもあり
に。起居もやすめるまく。昔に董生を学ぶ。あるひとも
こと世者に園を窮めるも。かなくに。園の中なる樹
つたに学ぶに音に。ぶに。梅に。うぐひす。柳に。ほとゝぎす
むしとまのしをわるとやんわれ。ちに。ちの。ちを。ちの。ちを
しに。ちの。ちの。学ぶの窓に。幸を弱る甲斐あるべく。程朱に道に
こうに。鄒魯の風を。多く。韓欧の文を。あのく。耶郷に
歩を学ぶ。ちく。老に。ちく。老に。ちく。ちも。ちの。年月に
ちく。世のこと。かに。ちく。者に。ちに。盛衰栄枯に。ちに

うつと尺蠖とや、そん既と顔よ富貴を溺れ実代とく
禍福を糾る繩に縛れあること人なるあっかまあくきゆよ
あく吾聖人の建給へる綱五常の道乃ち天地と並び代へ古今
の変ることなく先ちうとハかたもあるくうに人として作き崇
ふへきこと此道なり。如きも儒教世よ行なきさらしよと
人く義理よりとく。利欲よさとくする行よ常の道ふたまて
風俗日よりとゆくなりけうに作ることゆきあく
一代の風教を維持せんとすもの力とよりきるあるあ
よ蜉蝣の樹を撼うし。精衛の海を填むよ似たるくしさハこと
世を憂民を彰よするも吾儒分内の事なれ先を度外よ



先きをもあるあ尺いうかるあ尺世よ老仏宿儒と稱る人のはて
実伝を肆ゆ。又を他道を雑へく。仁義の常の道ふ我
よすることなくしけるよ。名く勢て彩を競く。俗耳を駭そ
ゆ好よ投するかするくしいうとに惜きまかること。古人のいゆる阿
世曲学ゆやうを伝る徒いくあるくしよう人とさもあるハあき
後風俗を背よあ尺なるもの。ゆ成ふ行ちとれく
仁義の道とをるる法。某倫の模範を先くしかること責
て儒とかるくしを尺とも、ふ多よあるあ尺ちの乃
初とくく人を惑ふ志分の偏を万代と、いとふ中よ我たく
又常の道よんをよ世くいふも、かとを尺貝ゆたき地を伝道ゆう

やうく かくやうに年をとるまで 後世のなのこし
しまつもかはらてゆうむ七十よおのよのみ作の道をあやまりしく
此冬記ふ去る辛亥の冬より翌壬子の春迄 雑話 戯書集むること
稿を脱し ぬ 壬子の春を起して 秋に終る
吾黨よりのく作を作る序後事年月を省る万一此助 ものこんか
しよりとくなく 試毫の義戯書に附して 後世に傳
ア 玄窮 よりおよのの 序をあらしめんとす
享保壬子の年 冬十月 鴉巣 志る
駿臺雑話巻五 畢

寛政八年丙辰五月
浪華書林
心齋橋北久太郎町
河内屋喜兵衛